◆受賞のことば◆

「当たり前」だったことが「当たり前」でなくなるコロナ禍で

島田 将太

（コミュニティ福祉学科 2005 年卒業）

思い返せば、私がコミュニティ福祉学部に入学するとき、福祉への具体的な動機はなく、新座の自然あふれるキャンパスをぶらぶら、ぼんやりと過ごしていました。そんな私がこのような賞をいただけるなんて、と驚いています。推薦していただいた方々にはこの場を借りて感謝申し上げます。

私は子どもの頃から、あまり深く考えることはなく、みんなが当たり前、常識と思うような行動を選ぶ人間でした。そんな自分が変わったと思えたのがコミュニティ福祉学部でした。

２年生の時、ある学部の友人に「バングラデシュに行くゼミに入ろう」と誘われ、外国という響きに惹かれたのか、そのゼミに入りました。初めての海外体験がバングラデシュ。今までにないほどの衝撃を受け、バングラデシュ人の力強さとカレーのおいしさに無性に惹かれました。その思いは止まず、３年生を終えた時、大学を休学しバングラデシュに単身滞在することにしました。今までの自分ではありえない行動だったと今でも思います。

バングラデシュに住んでみると、これまでの考え方や常識では対応できないことばかり。自分が身に着けてきた考え方や学んだことが「当たり前」ではなかったことを突き付けられました。この時の経験は強く残り、今の私を形作っている原体験といえるかもしれません。

住む環境が変わったり社会状況が変化するだけで、人々の困りごとや求めることは大きく変わります。それはバングラデシュでも感じましたし、コロナ禍でもまさに体感しています。自分の知らないことや考えてなかったことに出会う日々で、今まで私が考えていた福祉の「当たり前」は必ずしも「当たり前」ではないと感じています。そもそも「福祉」とは自分たちの知らないことや当たり前でないことを考え、取り組むことが大事な役割かもしれない。そう考えると、今はある意味チャンスだとも思います。

いろんな偶然や環境が相俟って、縁が繋がり、自分の世界を広げられたコミュニティ福祉学部には今でも感謝の気持ちがあります。この「まなびあい」という場もとても好きで、たくさんの出会いや気づきをもらっています。年に１回、大学時代を振り返りながら今の自分を見つめ直す時間は有意義なものです。今後もこの場が多くの人にとって、たくさんの縁や気づきの得られる場として盛り上がっていくことを願っています。